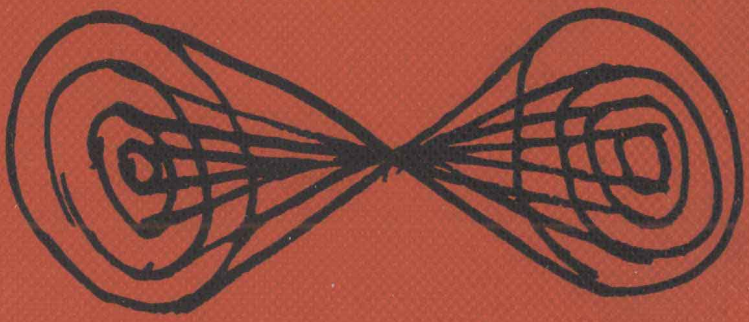

ギリシア思想家集

ヘシオドス　クセノパネス　ヘラクレイトス
パルメニデス　エンペドクレス　イソクラテス
デモステネス　エピクロス　エピクテトス
マルクス・アウレリウス　セクストス・エンペ
イリコス　プルタルコス　ディオゲネス・ラエ
ルティオス

広川洋一・藤沢令夫・田中美知太郎
長坂公一・中村善也・森　進一・
鈴木照雄・北嶋美雪・加来彰俊　訳

世界文學大系

63

筑摩書房版

世界文学大系 63

ギリシア思想家集

1965年9月30日　初版第1刷発行
1970年6月10日　初版第8刷発行

編　者　田中美知太郎
発行者　竹之内静雄
発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
振替 東京 4123　電話(291)局7651
郵便番号　101－91

(分類) 0398 (製品) 20063 (出版社) 4604

目次

ヘシオドス　広川洋一訳
神統記　7
クセノパネス　藤沢令夫訳　27
ヘラクレイトス　田中美知太郎訳　32
パルメニデス　藤沢令夫訳　47
エンペドクレス　藤沢令夫訳　52
イソクラテス　長坂公一訳
平和について　67

デモステネス
ピリッポスを攻撃する演説（一）　中村善也訳　91
オリュントスにかんする演説（二）　中村善也訳　99
ピリッポスを攻撃する演説（二）　中村善也訳　104
ケロネソス情勢についての演説　田中美知太郎訳　110
ピリッポスを攻撃する演説（三）　中村善也訳　122
エピクロス　森進一訳
メノイケウスへの書簡　133
要説　136
断片　141
エピクテトス　長坂公一訳
談話集　153
言行録から　174
手短かに　175

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アウレリウス　鈴木照雄訳
自省録　190
セクストス・エンペイリコス　藤沢令夫訳
ピュロン哲学の概要（第一巻）　218
プルタルコス
テミストクレス　鈴木照雄訳　259
アルキビアデス　森進一訳　276
カエサル　加来彰俊訳　303
ディオゲネス・ラエルティオス　北嶋美雪訳
ソクラテス　341
アリスティッポス　350
アンティステネス　361
ディオゲネス　367

総説　田中美知太郎　386
解説　藤沢令夫・中村善也・加来彰俊・鈴木照雄　388

装幀　庫田　叡

ギリシア思想家集

神統記

ヘシオドス
広川洋一訳

ヘリコーン[1]の歌女神たちの讃歌から歌いはじめよう、彼女たちはヘリコーンの高く聖い山に住み、足どりも優しく舞い踊るのは、菫色した泉のほとり、クロノスの力強い御子（ゼウス）の祭壇の辺。　四

さてペルメーソス[2]や馬の泉[3]、清らかなオルメイオス[4]で優しい身を洗い浄めるとヘリコーン山の頂きで晴れやかな愛らしい踊りを舞い踊る、力を籠めた足どりで。ここを出て立ち、深い靄につつまれて夜道を進みながら、艶やかな声あげて彼女たちが誉め称えるのは神楯もつゼウス、黄金の沓はくアルゴスの女神畏いヘーレー、神楯もつゼウスの娘輝く眼のアテーネー、ポイボス・アポルローン、弓矢を悦ぶアルテミス、大地を支え大地を震わすポセイダーオーン、畏いテミス、眼差迅い[5]アプロディーテー、黄金の冠つけたヘーベー、美しいディオーネー、レートー、イーアペトス、悪智慧長けたクロノス、曙、大いなる太陽、輝く月、また大地、大いなる太洋、暗い夜、そのほかの常磐にいます神神の聖い族。かつて聖いヘリコーン山麓で羊らの世話をしていたこの（わたし）ヘーシオドスに麗わしい歌を教えてくれたのは彼女たち。神楯もつゼウスの娘、オリュンポスの歌女神なる女神たちがまずはじめにわたしに言ったのは次の言葉。　二六

「野山に暮らす羊飼たちよ、恥ずべき哀れなものたちよ、喰いの腹しかもたぬ者らよ、わたしたちはたくさんの誤まったことがらを真実しやかに話すこともできます、けれどもまたわたしたちがその気になれば真実を話すこともできるのです」　二八

大いなるゼウスの口達者な娘たちはこう言った、そして育ちのよいオリーブ樹の若枝を手折り、（その若枝を）みごとな杖としてわたしに与えた。そしてわたしの（身の）うちに神の声を吹きこんだ、これから起こることがらと昔起こったことがらを誉め歌わせるために。そして常磐にいます浄福の神神の族を誉め歌うよう、ただし（その讃歌の）初めと終りではいつも彼女たち（歌女神）を称え歌うようにと命じたのである。もっとも槲樹や岩根のことに類したこういうことはもうこれくらいにしておこう。[6]　三二

さあ歌女神たちのことから始めよう、彼女たちは今在ること、この先起こること、すでに在ったことがらを声を合わせて歌い語り、オリュンポスに住む父神ゼウスの大御心を悦ばす。麗わしい歌声が疲れも知らず歌女神たちの口から流れ出て、彼女たちの百合花にも似た歌声が広がりゆくとき、雷とどろかす父神ゼウスの館は悦びに満ちる。また雪を戴くオリュンポスの嶺と不死の神神の館は木魂する。彼女たちは神さびた声あげて、まず歌のはじめに、大地と広い天[7]が生んだ神神と、この両柱から生まれた、善の与え手たちなる神神、これら神神の聖い族を誉め歌う。さて次には神神と人間どもの父ゼウスを、（この神が）神神のうちでどれほどにも並びなく秀でており、力においてもいかに無双のものであるかを歌う、歌の初めにも終りにも誉め称えて。それから神楯もつゼウスの娘、オリュンポスの歌女神たちは人間どもと力強い巨人どもの族を歌いオリュンポスのゼウスの心を悦ばす。この歌女神たちを、エレウテールの丘[7]を治めるムネーモシュネーがクロノスの御子、父神ゼウスに添寝してピーエリエーで生んだ、（彼女たちを）災厄を忘れさせ悲しみを鎮めるものとして。すなわち賢いゼウスは不死の神神から遠く離れたところで彼女（ムネーモシュネー）の聖い臥床にのぼり、九夜彼女と臥った。さて一年が過ぎ、季節が巡り、幾度も月が虧けて、許多の日日がへめぐり、彼女は九人の娘を生んだ、娘たちはひとつ心をもち、憂い心もなく歌に心を注いでいる、雪を戴くオリュンポス第一の高嶺からほど遠からぬ処で。そこには彼女たちの晴やかな舞踏の場と美しい住居があり、その傍らには優雅たちと欲望が歓をつくして住んでいる。そして唇から愛らしい声あげて万物の習いと神神の恵み深い気性を称える。　五五

それから彼女たちは麗わしい声も誇らかに、神さびた歌うたいながらオリュンポスへ赴いた。彼女たちの歌に和して黒い大地はあたりに鳴り響動もし、彼女たちが父神のもとへ急ぐにつれ、こよない響きが足もとから湧き起こった。この神（ゼウス）は力づくでその父クロノスを打ち負かしてからは、自ら雷鳴と赤赤と燃え立つ雷を手に天空を知ろし食す。そして彼はいっさいの頒前を公平に神神に分配し、（彼ら各自の）特権を公示した。 一四

これらのことをオリュンポスに宮居する歌女神たち、大いなるゼウスの儲けた九人の娘たちは歌った、（その九人の名は）クレイオー、エウテルペー、タレイア、メルポメネー、テルピュシコレー、エラトー、ポリュムニア、ウーラニエー、カリオペーで、このカリオペーはみんなのなかで第一等の位にある、というのも彼女は畏い貴族たちに侍るのだから。ゼウスに育まれた貴族たちの誰であれ、大いなるゼウスの娘たちが誉れを授けてその出生を見守ると、この者の舌に甘い露を滴らせる。するとその唇からは優美な言葉が流れ出る。そしてすべての人びとが彼の方を注目する、（彼が）真直な裁きによって判決を下すときには。また揺ぎない弁説を行なって、どれほど大きな係争でもたちまち鮮かに終わらせてしまう。というのも次のようなわけで貴族たちは思慮深いからである、人びとが集会で謬まった方向に惑わされているとき、矯めなおしの仕事をやすやすと完うする、やさしい言葉で（人びとを）説き聴かせて。彼が集会のなかを通り過ぎるときには、人びとは神にでもあるかのように敬いの念から彼に心のこもった会釈をするし、彼は集まった人びとのうちで際立って見える。これが歌女神たちの、人間どもへの聖い贈りものである。というのも人びとが歌人や竪琴弾きとなってこの地上に（生を享けるのも）歌女神たちや遠矢射るアポロンの加護によるのだから、もっとも貴族たち（が高貴な存在として地上にながらえるのは）ゼウスの加護によればこそである。[8] 歌女神たちの愛でる人こそ幸いである、（その人の）唇からは甘い言葉が流れ出る。すなわち、よし人が憂い新たな心のうちに哀しみをもち心痛もひとかたではなくいたく憔悴していても、歌女神たちの召使である歌人が古往の人びとの誉れを称え、オリュンポスに宮居する神神を歌えば、たちまち彼は身の憂さを忘れ、切ないことも何ひとつ想い出しはしない。歌女神たちの贈り物がすみやかに他へ心を逸らせてくれる。 一四四

ようこそ、ゼウスの娘らよ、さあ麗わしの歌を恵み給え。常磐にいます不死の神神の聖い族を称えよ、大地と星散乱える天さらに暗い夜から生まれ、鹹い海に育まれた神神を称えよ。語り給え、まずはじめに神神と大地が、また諸河と大浪寄せる涯しない海が、また輝く星辰、高く広がる天空とこれから生まれた、善の与え手なる神神がどのようにして生まれたのかを。また神神がどのように富を分け、どのように特権を（それぞれに）分かちあい、さらにまたどのようにしてまずはじめに谷襞重畳たるオリュンポスの高嶺を手中に納めたのかを。これらのことがらを、オリュンポスに宮居する歌女神たちよ、はじめからわたしに物語れ、それらのうちで最初に生まれたものはなにかを。 一四五

まず原初に、カオスが生じた、さて次に〔雪を戴くオリュンポスの山頂に宮居するすべての不死の神々の[9]〕常久に揺ぎない座なる胸幅広い大地と路広の大地の奥底にある曖曖たるタルタロス、さらに不死の神神のうちでもことのほかに美しいエロスが生じた、この神は四肢の力をゆるめ、すべての神神とすべての人間どもの胸うちの心と考え深い思慮をうち拉ぐ。さてカオスから幽冥と暗い夜が生じた、次に夜からアイテールと昼日が生じた、〔夜が幽冥と情愛の契りして身重になり生みおとしたのである。[10]〕さて大地はまずはじめに彼女自身と同じ大きさの星散乱える天を生んだ、天が彼女（大地）をすっかり覆い、至福の神神の常久に揺ぎない座となるように。また大地は欝蒼とした山山に棲む山精の女神たちの楽しい遊山の場所、高い山山を生んだ、また大浪寄せる不毛の海、ポントスを生んだ、喜ばしい情愛の契りもせずに。さてその次に天と添寝して生んだのは深渦の巻く太洋、コイオス、クリオス、ヒュペリーオーン、イーアペトス、テイア、レイア、テミス、ムネーモシュネー、黄金の冠つけたポイベー、愛らしいテティス。これらのあとから悪智慧長

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

けたクロノス、子供たちのなかでいちばん恐るべき者が生まれた、そして彼は強壮な父を憎んだ。　一三八

さて彼女（大地）はまた不逞な胆もつキュクロープスどもを生んだ、ブロンテース、ステロペース、頑な心のアルゲースがこれで、ゼウスに雷鳴を贈り、雷電を造ってやった者どもである。彼らはその他の点では神神（の姿）に生き写しだったが、〔彼らは不死の神神から、死すべきものども、人間の言葉を話すものどもとして生まれ育った〕[11]ただ額の真中に一つ目があった。そこで円い目と綽名されたが、それというのも円い一つ目が彼らの額についていたからである。その所業のためにはすでに体力、腕力、術策とともに備わっていた。　一四四

さて大地と天からはまた三人の子供たち、巨軀をもち、豪胆な、言葉にも尽くせぬ者どもが生まれた、コットス、ブリアレオース、ギュエースら傲慢な息子たちがそれである。彼らの肩からは近寄ることも叶わぬ百の腕が伸び出ていて、頑丈な四肢にはそれぞれに五十の首が生えていた。その巨大な体軀には近寄ることも叶わぬ強い力が備わっていた。　一四五

これらの者どもは大地と天から生まれた子供たちのなかでも最も恐るべき者どもではじめからその父に憎まれていた。父（天）はその子供が生まれるやすぐさま皆大地の奥処に隠してしまい、彼らが光（明の世）のなかへ上がって来ないようにしたのである、天はこの悪業にうつつをぬかしていた。だが広い大地は腹いっぱいに詰め込まれて心のなかで呻いていた、そこで狡猾で意地悪いたくらみを企てた。すなわち灰色の鋼鉄の族を造り、それで大鎌をこしらえると愛しい子供たちに（計画を）語った。子供たちを励しながらこう言った、心に憤って。　一四六

「わたしと、かの向う見ずな父から生まれた子供たちよ、おまえたちがわたしの言うことを聴いてくれる気なら、さあおまえたちの父の非道な仕業に復讐してやりましょう、それというのもあのひとがはじめに恥知らずな所業を企らんだのですから」　一四七

このように言った。しかし懼れがすべての者どもを摑え、誰ひとりとして一言も口にする者はなかった。だが策に長けた大いなるクロノスは勇を奮って彼の愛しい母に答えて言った。　一四八

「母上、その役目ならばこのわたしが引き受けて為し遂げましょう、というのも邪な名をもつわれらが父のことなぞわたしはいささかも気に留めてはいませぬし、彼のほうがはじめに恥知らずな仕業を企らんだのですから」　一四九

こう言ったから広い大地は心に大いに悦び、彼を待ち伏せの場所につけて隠した、そしてするどい歯のついた大鎌を手渡し、密計をすっかり打ち明けた。さて大いなる天が夜を率いてやって来た、そして情愛を求めてすっぽりと大地全体を蔽って広がり横たわった。そこで息子（クロノス）は待ち伏せの場所から左手をのばし、右手にはするどい歯のついた大きな長い鎌を執って、すばやくわが父の陰部を刈り取って、[12]背後へ投げつれば、それは後ろへとんで行った。だがそれ（陰部）は徒らに手から離れ去ったのではなかった、というのもそこから迸り出た血の滴りを大地がすっかり受けとめ、歳月が巡ると、力強い復讐女神たちと煌めく鎧をつけ長槍を手ばさんだ大いなる巨人たちを生み、また涯しない大地の上でメリアイと呼び名される精[13]たちを生んだからである。さて彼（クロノス）が父の陰部を鋼鉄（の鎌）で刈り取って陸地から大浪寄せる海原へと投げ棄てるや、それは久しい間海原の面に漂うていた、そしてそのまわりに白い泡が不死の肉から湧き立ち、その泡のなかでひとりの乙女が生いたった、まずはじめに乙女はいとも畏いキュテーラに立ち寄り、そこから四面を海の繞るキュプロス[14]に着いた。畏く美しい女神が陸に上って行くと優しい足もとに柔らかな草が萌え出るのであった。彼女を、神々も人間もアプロディーテー、すなわち泡から生まれた女神、麗わしい花冠つけたキュテレイアと呼んでいる、というのも泡のなかに生い育ったのだから。また（人が）キュテレイア（と呼ぶの）は、キュテーラ[15]に立ち寄ったからで、キュプロゲネース（と呼ぶの）は大浪寄せるキュプロスで生まれたから、またピロンメーデース（と呼ぶの）は陰部から立ち現われたのだからである。さて彼女が誕生してはじめて神神の族の仲間入りをするにあたって、エロスと美しい欲望がお伴をした。この特権をはじめから彼女はもっていた、この持分を人間どもと不

死の神神の間でもっていた、すなわち乙女たちの（甘い）囁き、微笑と快い欺瞞、情愛と優しさがそれである。　二五五

さて父、大いなる天は自分の儲けたこれらの子供たちを罵って綽名をもって彼らをティータンどもと呼びならわした、すなわち彼は、彼らが無頼な所業に（気を）張りつめて非道な悪事をやってのけたが、その報い（復讐）が後にやってこようと言ったのである。　二五六

さて夜は忌わしい定業と暗い凶運と死を生み、また眠り、夢たちの族を生んだ、〔暗い夜の女神がたれと一つ床に入ることもなく生んだのである。[16]〕また次に非難と痛ましい苦悩を生んだ。　二五七

さてまた名にし負うオーケアノスのかなたでみごとな黄金の林檎と実をつけた樹木を護る黄昏の娘たちを、また運命女神たち、容赦なく復讐遂げる命運たちを生んだ、〔クロート、ラケシス、アトロポスがそれで、彼女たちは人間どもが生まれる際に悪（運）と幸（運）を授ける。[17]〕また彼女たちは人間どもと神神の逸脱（の罪）を追及する、決して怖ろしい怒りを鎮めはしない、過ちを犯す者に手ひどい復讐を遂げるまでは。　二五八

また破滅の夜は死すべき身の人間どもにとっての禍い、義憤を生んだ、また欺瞞と愛欲、忌わしい老齢、頑な心の争いを生んだ。　二五九

さて憎さげな争いは痛ましい労苦と忘却、飢餓と涙にみちた悲歎、戦闘と戦さ、殺害と殺人、闘争と嘘、口争いと不法、破滅を生んだ、これらはたがいにひとつ心の者どもである、また（争いは）誓いを生んだ、この誓いはたれかがわざと偽りの誓いを立てると地上に住む人間どもを苦しめる。[19]　二六〇

さて海は、彼の子供たちの長子、嘘をつかず正直なネーレウスを儲けた、人びとは彼（ネーレウス）を老人と呼ぶが、それというのも彼が誠実で優しく、正義の掟を忘れるわけもなく、正しいことがらをしかと弁え、思いやりのある思慮をそなえているからである。また（海は）大地と契って、大いなるタウマスと誇らかなポルキュスを生み、頬美しいケートー、胸うちに鋼鉄の胆もつエウリュビエーを生んだ。　二六一

さてネーレウスと、諸河のゆきつくところなる太[20]洋の娘、髪豊かなドーリスから女神たち（の容色）にいささかも劣らぬ娘たちが不毛の海に生まれた、プロートー、エウクランテー、サオー、アンピトリーテー、エウドーレー、テティス、ガレーネー、グラウケー、キューモトエー、スペイオー、トエー、愛らしいハリエー、パーシテエー、エラトー、薔薇色の腕もつエウニーケー、気品に富めるメリテー、エウリメネー、アガウエー、ドートー、プロートー、ペルーサ、デューナメネー、ネーサイエー、アクタイエー、プロートメディア、ドーリス、パノペイア、容貌美しいガラテイア、可愛いいヒッポトエー、薔薇色の腕のヒッポノエー、キューモドエー、彼女はキューマトレーゲーと足首優しいアンピトリーテーといっしょに縹渺たる海原の波浪と吹き荒む風の息吹きをやすやすと鎮める、またキューモー、エーイオネー、花冠美しいハリメーデー、微笑愛でるグラウコノメー、ポントポレイア、レーアゴレー、エウアゴレー、ラーオメデイア、プーリュノエー、アウトノエー、リューシアナッサ、姿優しく顔立ちとても非の打ちどころないエウアルネー、また姿優しいプサマテー、清らかなメニッペー、ネーソー、エウポンペー、テミストー、プロノエー、不死の父の心もつネーメルテースが生まれた。[21]これらが非の打ちどころないネーレウスの儲けた五十人の娘たちでみごとな手仕事に秀でていた。　二六二

さてタウマスは流れ深いオーケアノスの娘エーレクトレーを娶ると、彼女は脚迅い虹と髪豊かな施風たち、アエロー、オーキューペテースを生んだ、彼女たちは速やかな翼に乗って風の息吹きや鳥たちと肩を並べて翔けて行く、すなわち時の流れるように[22]さっとばかりに天翔けるのである。さてケートーはポルキュースに、生まれながらに灰色の髪をした、頬美しいグライアイを生んだ、この娘たちを不死の神神も地上を歩む人間どももグライアイと呼んでいる、また彼女はみごとな衣を着けたペンプレードー、淡紫色の衣を纏うたエニューオー、名にし負う

オーケアノスのかなた、声澄める黄昏の娘たちの憩うあたり、夜との境いをなすところ、ここに棲むゴルゴーたち、すなわちステンノー、エウリュアレー、悲惨な目に会ったメドゥーサを生んだ。メドゥーサは死すべき身の者であったが、他の二人は不死で不老であった、彼女（メドゥーサ）と黒髪のポセイダーオーンが柔かい牧草と花間で共寝した。[24]　二八〇

さてペルセウスが彼女（メドゥーサ）の首を刎ねるやそこから大いなるクリューサーオールと馬ペーガソスが躍り出た、この馬はオーケアノスの泉のほとりに生まれたことからその名があり、他は手に黄金の剣をもっていたことからその名があった。さてペーガソスは羊群の母なる大地をあとに飛び立ち、不死の神神のもとへと参入した、いま彼はゼウスの高館に住み、賢いゼウスのもとへ雷鳴と雷電を運ぶ。　二八五

さてクリューサーオールは名にし負うオーケアノスの娘カルリロエーと共寝して、三つの首もつゲーリュオネウスを儲けた、ところがこのものを力強いヘーラクレエースが四面を海の繞るエリュテイエーの島で足どり重い牛どもの傍らで退治した。[25]これはヘーラクレエースがオーケアノスの流れを渡って、名にし負うオーケアノスのかなたの曖曖たる飼い場で、牧犬オルトスと牛飼いエウリュテイオーンを屠り、額広い牛どもを聖いテイリュンスへ連れてきたあの日のこと。　二八四

さて彼女（カルリロエー）は空ろな洞穴で別の争い難い怪物、死すべき身の人間どもにも似ない、心険しい聖いエキドナを生んだ、その半身は眼煌めく頬美しい女精、他の半身は巨大な、恐るべき大蛇で、（体に）斑があり、聖い大地の奥処に棲み生肉を喰う。さて不死の神神や死すべき身の人間どもから遠く離れたそこには、空ろな岩の下深くに彼女（エキドナ）の洞穴があった、そこを神神が栄えある棲処として暮らすよう彼女に定めたのである。その処で恐ろしいエキドナ、常磐に不死身で不老の女精は、大地の下（に住む）アリモスびとたち[26]の間で番をつとめる。　二八六

さて眼煌めく彼女（エキドナ）と乱暴で無法者の、恐ろしいテュパオーンが情愛の契りをしたといわれている、やがて身ごもった彼女は心険しい子供たちを生んだ、すなわちまずゲーリュオネウスの牧犬オルトスを生み、つぎに、争いもならず口にも出せない、生肉喰うケルベロスを生んだ、これはアイデース（冥王）の青銅の声もつ番犬で、五十の首をもち、残忍で、手のつけられぬものである。また三番目に、破滅のもとに通じたレルネーの水蛇を生んだ、これを白い腕のヘーレーが育てた、力強いヘーラクレエースに酷く立腹して。[27]ところがこれ（水蛇）をゼウスの息子でアンピトリュオーンの子（でもある）ヘーラクレエースが尚武のイオラーオスといっしょに獲物狩る女神アテーネーの謀りごとによって容赦を知らぬ青銅の刃にかけて撃ちとった。彼女（水蛇）は、手のつけられぬ（激しい）火を吐くキマイラを生んだ、これは恐るべき怪物で、（体軀）巨大、脚も迅く剛力であった。さて彼女（キマイラ）には三つの首が生えていて、そのひとつは目つき鋭い獅子の首、ひとつは牝山羊の首でもうひとつは獰猛な竜、蛇の首であった。〔前は獅子、後ろは竜、真中は牝山羊のかたちをし、燃えさかる火の勢いを凄じく吐くのだった〕[29]彼女（キマイラ）をペーガソスと勇敢なベルレロポンテースが撃ちとった。だが彼女（キマイラ）はオルトスの愛をうけて、カドモスびとらの破滅の因、怖るべきピックス[30]を生み、またネメアの獅子を生んだが、この獅子をゼウスの栄えある妃ヘーレーが育てあげ、人間どもにとっての災難としてネメアの山峡に棲まわせた。この獅子はここに棲みついて人間どもの族を喰い殺し、ネメアのトレートスとアペサースの山に猛威をふるった。だがこれを逞しいヘーラクレエースその人が打ち殪した。[31]　二八三

さてケートーはポルキュスと情愛の共寝して末っ子、恐ろしい蛇を生んだ、これは巨大なとぐろを巻いて暗い大地の奥処で黄金の林檎を見張っている。これがケートーとポルキュスから生まれた子供である。　二八六

テーテュスはオーケアノスに渦巻き流れる諸河[32]を生んだ、ネイロス、アルペイオス、深渦巻くエーリダノス、ストリュモーン、マイアンドロス、流れ美しいイストロス、パーシス、レーソス、白銀の渦巻くアケローイオス、ネッソス、ロディオス、ハリアクモーン、ヘプタポロス、グレーニーコス、アイセーポス、聖いシモエイス、ペーネイオス、ヘルモス、流れ清いカイー

コス、大いなるサンガリオス、ラドーン、パルテニオス、エウエーノス、アルテースコス、聖いスカマンドロスがそれである。

また彼女（テーテュス）は娘たちの聖い族を生んだ、彼女たちはアポルローンの君と（テーテュスの息子たちの）諸河といっしょに、人を若者に育てあげる、（彼女たちは）この持分をゼウスから授っているのである、（その彼女たちの名は）ペイトー、アドメーテー、イアンテー、エーレクトレー、ドーリス、プリュムノー、神にも似たウーラニエー、ヒッポー、クリュメネー、ロデイア、カルリロエー、ゼウクソー、クリュテイエー、イデュイア、パーシトエー、ブレークサウレー、ガラクサウレー、可愛いいディオーネー、メーロボシス、トエー、容貌美わしいポリュドーレー、姿優しいケルケイエー、牡牛の眼したプルートー、ペルセーイス、イアネイラ、アカステー、クサンテー、美しいペトライエー、メネストー、エウローペー、メーティス、エウリュノメー、淡紫色の衣着けたテレストー、クリュセーイス、アシエー、艶やかなカリュプソー、エウドーレー、テュケー、アンピロー、オキュロエー、それにステュクス、彼女は皆のなかでいちばんの長である。彼女たちはオーケアノスとテーテュスとから生まれたいちばん年上の娘たちで、この他にもたくさんの娘たちがいる。すなわち足首優しい三千のオーケアノスの娘たちがいるのである、女神たちの愛でるこの者たちは（地上に）遍く広まっていて、いたる処で大地と湖の深みを一様に司っている。さてまたそれと同じほどにもたくさんの、湧き音たてて流れる諸河、オーケアノスの息子たちがあり、これも女神テーテュスの生んだもの。だが死すべき身の人間どもにはそれらすべての（河川の）名を語り尽くすことはむずかしい、もっとも（河それぞれの）ほとりに住む人ならば、それぞれ（身近かの河の名を）知ってはいるが。

さてテイアーはヒュペリーオーンの愛をうけて、大いなる太陽、輝く月、曙を生んだ、曙は地上のすべての人間どもと広い天にすまう不死の神神に光を齎らす。

さてエウリュビエーはクリオスと情愛の共寝して大いなるアストライオスと女神のなかの女神なるパルラス（アテーネー）、ペルセースを生んだ、彼（ペルセース）はすべての人間どものうちで智慧にかけては並外れて秀でていた。

さて曙はアストライオスに太い胆もつ風たちを生んだ、すなわち晴空齎らすゼピュロス（西風）、脚迅いボレアース（北風）とノトス（南風）、女神が男神と情愛こめた共寝して生んだのである。これらの後で朝まだきに生まれ出る女神（曙）は暁を齎らす者（暁の明星）と天を飾る煌めく星辰を生んだ。

さてオーケアノスの娘ステュクスはパルラス（アテーネー）と契って、競争、足首やさしい勝利をその館で生んだ、名にし負う子供たち、威力と暴力を生んだ、これらの者どもはゼウスから離れたどんな家も住居ももたず、また道ももたない、大神（ゼウス）が彼らを引具するときは別として。彼らはいつも雷鳴轟ろかすゼウスのもとに起居している。というのもオーケアノスの娘、不滅のステュクスはこのように考え計ったからである、それはオリュンポスの雷光擲ち放つ大神が聳ゆるオリュンポスに不死の神神を呼び集め、こう宣べた日のこと。神神のうちたれであれ、ゼウスに組してティータンの族と戦うてくれるなら、わし（ゼウス）は（その神のもつ）いかなる権能も剝奪することはないであろう、（その神には彼が）不死の神神の間で以前もっていたその特権を（そのまま）授けるであろう、してまた、（これまで）クロノスによって特権も権能も奪われていたものたちには特権と権能を回復させてやろう、当然のことながら、と。そこで不滅のステュクスは彼女の子供たちを引き連れて第一番にオリュンポスへとやって来た、愛しい父の勧めに従って。彼女をゼウスは誉め称え、偉大な贈り物を授けた、すなわち彼女を神神の大いなる誓いと定め、また彼女の子供たちを常久に彼のもとに住まわせたのである。そしてまことに彼が約束した通りに、すべてのものたちにいっさいをすっかり履行した、そして自らは力強く支配し治めている。

さてポイベーはまたコイオスの情愛の臥床へとやって来た、女神は男神の愛をうけて身重となり、黒衣を纏うたレートーを生んだが、彼女（レートー）はいつも穏かではじめからおとなしく、オリュンポスのすべての神神のうちでも

いちばん柔和であった、彼女は人間どもや不死の神神に優しい。またポイベーは秀れた名をもつアステリエーを生んだ、この娘をペルセースがあるとき自分の大きな館に連れて行き、（彼女を）彼の愛しい妻と呼ばれるようにした。四一〇

さてアステリエーは身重となりヘカテー[38]を生んだ、この彼女（ヘカテー）にクロノスの御子ゼウスは他の者たちにも勝る栄誉を授けた、すなわちすばらしい贈物を与えたのである、（彼女が）大地と不毛の海を領前としてとることがこれである。また彼女は星散乱える天[38]にも特権を授かり、不死の神神にもたいそう敬われている。すなわち今でもなお地上に暮らす人間どもの誰かが立派な供物を捧げ慣習に則って祈りをあげるときには、いつでも彼はヘカテーに呼びかけるのが習いである。女神（ヘカテー）がその人の祈りを好意をもって聴き入れると、その人にはいともやすやすと大きな誉れがやってくる、そして女神は彼に福運を授ける、まさしく彼女にはその神威が宿っているのだから、というのも、大地と天から生まれ、特権をもつかぎりのすべての神神のうちで彼女はこの権能をもつからである。クロノスの御子は彼女を虐待するようなことは決してなかったし、彼女が先代の神神であるティータンの族の間でこれまで保持していたかぎりのもの（特権）を奪い取ることもなかった、彼女（ヘカテー）は（権能の）分配がまずはじめに行なわれたそのままに、大地と天と海における権能を保持している、また独子であるために、女神は少ない栄誉どころか、かえって大きな栄誉を受けている、ゼウスが彼女を誉め称えるのだから。お気に入りの者には、女神は大いに援助を与え恵みを施す。四一三

彼女は裁判のさいに畏い貴族たちの傍らに座す、また彼女のお気に入りの者は集会で衆に抜きん出て目立ちもする。そして人びとがひとを滅ぼす戦さのために身支度するとき、女神はそのときもお気に入りの者に味方して勝利を与え誉れを齎らす。人びとが競技で技を競うとき女神はまた親切である、そこでもまたこの女神は彼らの味方をし恵みを施す、するとその者は力と強さで勝利をおさめ、みごとな賞品をやすやすと心楽しく獲得し、両親に誉れを齎らす。また騎手にも親切に援助を与える、お気に入りの者ならば。四一九

また灰色の危い（荒模様の）海で仕事をする人びとにも、ヘカテーや轟音とどろかす大地を震わす神（ポセイダーオーン）に祈りをあげる人びとにも、栄えある女神は大きな獲物をいとも容易に授けたり、目の前に現われた（獲物）を造作なく奪ったりもする、彼女がその気になりさえすれば。ヘルメースといっしょに畜舎の家畜を殖やし育てるにも（この女神は）親切である、牛の群や山羊たちの幅広い群、長毛の羊どもの群を、女神がその気になりさえすれば、わずかのものから殖やしもするし、また多くのものを滅ぼしもする。母の唯ひとりの子ではあっても、このように彼女は不死の神神の間で、その権能のゆえに称えられている。四二九

そしてクロノスの御子（ゼウス）はその日以後[39]いっさいを見る曙の光をその目で見ることになった子供たちの養育者とした、このようにはじめから彼女は子供の養育者であり、これらが彼女の特権である。四三二

さてレイエーはクロノスの愛を受けて輝かしい子供たちを生んだ、すなわちヒースティエー[38]、デーメーテール、黄金の沓はくヘーレー、冷酷な心をもち地の下の館に住む強いアイデース、轟音とどろかす大地を震わす神、また神神と人間どもの父、その雷鳴で広い大地も揺れ動く賢いゼウス。ところが大いなるクロノスは、その子供たちが聖い母胎から膝へ生まれおちる片端から、これらの子供たちを呑みこんだ、己れ以外の栄えある天の裔の神神のたれかが不死の神神の間で王者の特権を獲ることのないようにと図って。というのも（クロノスは）自分がどれほど力強くとも、己れの息子によって、大いなるゼウスの謀りごとにより、いつの日か打ち殪される定めになっているのを、大地と星散乱える天から聴き知っていたからである。そこで彼は警戒の眼を疎かにするどころか、眼を凝らして見張りをし、自分の子供たちを呑み込んだから、果てしない悲しみがレイエーを摑えた。さて彼女は神神と人間どもの父ゼウスを近く出産しようとしていたそのとき、（彼女は）愛しい両親大地と星散乱える天によい智慧を授けてくれるようにと願した、どうしたらクロノスに知られずに愛しい子供を生めようか、また

彼女自身、悪智慧長けたクロノスの呑み込んだ子供たちのために彼（ゼウス〈の父〉クロノス）への復讐を遂げられようかと。両親は愛しい娘の願いを快く聴き入れ承知した、そしてその剛毅な心の息子、王クロノスについてこれから起こるべく定められてあるいっさいの事柄（命運）を語った。そこで（両親は）彼女をクレーテーの豊饒な地リュクトスに遣った、彼女がその子供たちの末っ子として大いなるゼウスを出産しようとしていたその折に。さてその彼（ゼウス）を広大な大地は広いクレーテーの地で養い育てるために受けとった。（大地は）脚迅い暗黒の夜のまに彼を運んで、そこリュクトスの地へまずやって来た、そして彼を腕に抱き、鬱蒼としたアイガイオーンの山中、聖い大地の奥処の下にある深い洞穴に匿った。さて一方、（大地は）神神の先の王である天の子（クロノス）には産衣を着けた大きな石を与えた、彼はそれを手で摑みとると腹のなかに投げ込んだ、惨めにも心に少しも気付かなかったのである、石が（ゼウスの）身代りとなり、自分の息子は打ち殪されも煩わされもせず、（無事に）後に残され、その子はまもなく彼を腕力で打ち拉いで（彼を）王座から追放し、代って不死の神神の間に君臨するであろうということを。 四九一

そののち、かの君（ゼウス）の力と輝く四肢はみるみるうちに成長した、そして歳月がへめぐると、大地の思慮深い示唆に欺かれ、彼の息子の策略と力に打ち負かされて、悪智慧長けた大いなるクロノスは、いちばんはじめに（彼が）いちばん後に呑み込んだ石を吐き出した、その石をゼウスはパルネーソスの谷間にある美しいピュトーの地の路広の大地の下に安置した、後の世への標として、また死すべき身の人間どもにとっての不思議として。 四九〇

さて彼（ゼウス）は彼の父の兄弟たち（キュクロープスの族）、すなわち父（天）が愚かにも縛めておいた天の息子たちをその恐ろしい束縛から解き放ってやった、そこで彼らは（ゼウスの）親切に感謝の気持を忘れなかった、すなわち彼らは雷鳴と燃えさかる雷電と閃光を（ゼウスに）与えた、これまでは広大な大地がそれらを匿していたのである。（ゼウスは）これらを力と頼んで、死すべき身のものどもと不死の神神に君臨している。 四八九

さてイーアペトスは足首優しい乙女、オーケアノスの娘、クリュメネーを娶り、ひとつ床に入った。そして彼女は彼に剛毅な心の息子アトラース[39]を生んだ、また傲慢なメノイティオスともろもろの策に富む、老獪なプロメーテウスと思慮浅いエピメーテウスを生んだ、彼（エピメーテウス）ははじめから穀物を喰う人間どもにとって禍いの因であった、というのもゼウスの創った女性、乙女をはじめて受け取ったのは彼だったからである。さてメノイティオスを傲慢なものとみた見霽かすゼウスは燃えさかる雷電で彼を撃ち幽冥へと送り込んだ、彼の傲岸不遜な態度と度を越えた慢心のゆえに。またアトラースは力強い強制によって疲れを知らぬ頭と腕で広い天を支え、大地の涯、声澄める黄昏の娘たちの面前に立っている、この頒前（運命）を賢いゼウスが彼に定めたからである。また彼は策略に長けたプロメーテウスを、脱れもならぬ、冷酷な桎[40]で縛りつけた、柱の真中に（桎を）打ち込んで。そして彼に長い翼の鷲をけしかけた、（鷲は）彼の不滅の肝臓を喰うのだったが、肝臓は夜のまに長い翼の鳥が終日貪り喰ったのと同じ分量だけ生え出すのであった。その鳥を足首優しいアルクメーネーの雄雄しい息子ヘーラクレエースが退治した、そしてイーアペトスの息子（プロメーテウス）の酷い苦悶を払い、苦痛から彼を救った、もっともこれは高空に知ろしめすゼウスの意向に悖りはしない、テーバイ生れのヘーラクレエースの誉れが万物を養う大地の上で以前にも勝って大きくなるようにという（のがゼウスの意向である）。これらのことを斟酌した彼（ゼウス）は名にし負う息子（プロメーテウス）を誉め称えた、彼は立腹してはいたが、（プロメーテウスが）智略にかけてはクロノスの息子と互角に張り合ったことから、彼は以前（プロメーテウスに対して）怒りを抱いていたが、その怒りを鎮めたのである。というのは神神と死すべき身の人間どもがメコーネーで諍いをしていた折、その時もプロメーテウスは自ら進んで大きな牡牛を切り剖いてそれを（神神と人間どもの）前に置いた、ゼウスの心を欺こうとして[41]。すなわち彼は一方で人間どもの前には、牛皮の上に脂肪に富んだ肉と臓物を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com